

プレスリリース
2011年10月

桑折現 新作パフォーマンス | ボート ヒア、ボート

boat here, boat

構成・演出 : 桑折 現 (dots)

出 演 : 谷川清美 チョン・ヨンドウ 岩渕貞太 佐幸加奈子

2011年12月3日[sat] - 12月5日[mon] 川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

〔お問合せ〕

川崎市アートセンター (担当:小島・河合)

神奈川県川崎市麻生区万福寺 6-7-1 川崎市アートセンター

Tel: 044-955-0107 <http://kawasaki-ac.jp/> E-mail: theater@kawasaki-ac.jp

特設 web サイト <http://dots.jp/boat/>

鮮烈なビジュアルとスケール感を持つ重層的な舞台作品で注目を集める^{ドッツ}dotsの桑折現^{こおりげん}。

太田省吾に薫陶を受け、人間の根源的な存在を見つめる作品を発表し続ける気鋭の演出家が東京・ソウル・ウィーンから集った俳優・ダンサーと共に、新たな創作に挑みます。

ここと、そこと、むこう。昨日と、今日と、明日。わたしと、あなたと、かれら。
移動と留まる事を繰り返す、わたしたちの営みが向かう先にあるものとは。

この公演は、京都を拠点に活動するパフォーミング・アーツ・カンパニーdotsの主宰であり全作品で構成・演出を担う桑折現が、川崎市アートセンターの招きにより、横浜で滞在制作を行い創作した新作パフォーマンスを上演するものです。

桑折現は、学生時代に故・太田省吾に薫陶を受け、2001年にdotsを結成。鮮烈なビジュアルと重層的な人間の根源的な存在を見つめる作品が高く評価され、今後の活躍が期待されている若手の演出家です。



(写真)

右上・左上

dots 『KISS』(2009年)より

photo : Yoshikazu INOUE

右下・左下

dots 『カカメ』(2010年)より

photo : Yoshikazu INOUE

創作の原点と向き合う、往復書簡と滞在制作

2010年10月、川崎市アートセンターにおいて dots 『カカメ』(構成・演出・舞台美術:桑折現)が上演されました。関東圏では約6年ぶりの公演となった同作は、高い評価を獲得し、改めて桑折現の演出手腕に注目が集まりました。その公演後、桑折と川崎市アートセンターが、より深く連携して新作を上演することを決定。本作のクリエイションが始まりました。

まず、作品のコンセプトと構成を練り上げるため、2010年11月から桑折現と本作の構成補佐を担う須藤崇規の間で電子メールによる往復書簡を開始。そのやりとりは40回/50,000字に及び、今もなお続けられています。また、今回のクリエイションでは、桑折現が単身、横浜に滞在。桑折が dots のメンバーと共に京都で創作した前作『カカメ』と異なり、初めての顔合せとなるパフォーマー4人と約2ヶ月の集中的な滞在制作を横浜・急な坂スタジオで行います。

前作『カカメ』で、その演出法とイメージーションの新たな局面を提示し始めた桑折現。今回の公演では、「螺旋を一周少し上がった状態で自分の創作上の原点に立ち返っている」と桑折自身が語るように、新しい出会いと環境の中でその思考と手法を深化させつつ、「人をどう見せるか」、「言葉をどう扱うか」という舞台芸術の原点と向き合いながら創作に挑みます。

東京、ソウル、ウィーンから集う俳優・ダンサー



今回の滞在制作には、4人のパフォーマーが国境を越えて参加します。

東京から、太田省吾や三谷幸喜の作品をはじめ様々な舞台やテレビドラマ、映画などで幅広く活躍する女優・谷川清美と、独自の身体観に支えられた類を見ない身体表現を開拓し続ける気鋭の振付家・ダンサーの岩淵貞太。海外からは、韓国を代表する振付家の1人として世界各地で作品を発表するチョン・ヨンドウ。そして、幼少からダンサーを志し15歳でオーストリアに留学、コン

テンポラリーダンスを学び、現在もウィーンを拠点に活動する佐幸加奈子。

異なるバックグラウンドを持った個性的な俳優とダンサーの混成チームが桑折現と創作を共にします。

(写真:左から 谷川清美、岩淵貞太、チョン・ヨンドウ、佐幸加奈子 / photo: Takaki Sudo)

「言葉を楔として使いたい」

演劇からキャリアをスタートさせた桑折にとって、〈舞台作品の中で言葉をどう扱うか〉ということは常に探り続けてきた大きな命題です。これまでの桑折演出作品の多くは、ダンスの持つ抽象性やあえて言葉を手放したことによる広がりや1つの特徴となっていました。しかし、今回の創作にあたって桑折は、「今、作品を作ろうとしたときに、この現実に対してイメージと抽象性だけでは応答できないような感覚がある。言葉を楔として使いたい。」と言い、改めて大きな命題に積極的に向き合います。「物語や解説としてではなく、言葉がどのような力を持ちうるのか。自分なりの言葉の扱い方を探りたい。」という桑折が、どのような舞台を提示するのか。どうぞご期待ください。

「移動」と「境界」というキーワードから産まれるパフォーマンス

この作品でたどり着きたいのは、移動と留まることを繰り返しながら、過ぎていく私たちの生をみつめること。
人はなぜ移動していくのか？ そして、その先に何を求めているのか？
その問いの先に潜む、この世界の嘘や喜びや豊かさの正体に触れたい。 桑折現

本作の創作は、桑折現が今取り組みたいテーマとして提示した「移動」と「境界」という、2つのキーワードから始まりました。昨年11月から続く往復書簡と今年8月に行われた4人のパフォーマーとの1週間のワークショップを経て2つのキーワードに対する考察を深める中で、作品の構想は、故郷と異郷やここと向こうといった〈場所〉、過去・現在・未来という〈時間〉、自己と他者の〈関係〉の持つ距離という様々な位相へと広がっていきました。

そして、クリエイションは、ここではない場所で生きている/いた人々への想像、今この日本で生活して感じること、未来を描く小説に描かれた過去といった複数の視点を往き来しつつ進められています。

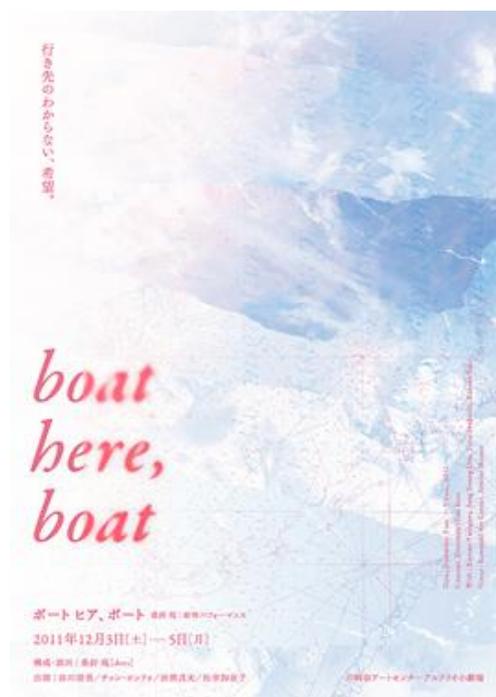
また、音楽は、〈静寂の中の強さ〉をテーマに国内外で様々な作品を発表し、これまでもdotsの舞台作品に音楽を提供してきた作曲家、^{はらまゆりひこ}原摩利彦が担当。桑折現との対話を通し、本作品のために新曲を書き下ろします。

4人のパフォーマーの身体、言葉、音楽、美術、照明という各要素が桑折の演出によって重層的に結び付けられる本作は、上演に立ち会うひとりひとりの胸の内に、故郷や異郷、過去や未来、自己と他者にまつわる様々なイメージを湧き上がらせることでしょう。そして、その経験は、方向感覚を失ったように漂うわたしたちの営みが、どこに向かおうとしているのかという問いを見つめる時間となることでしょう。

タイトルについて

『boat here, boat』(ボート ヒア、ボート)は、「移動」と「境界」という2つキーワードから導かれて生まれた〈ここから渡っていく/ここへ渡ってくる〉という作品を構成する1つのイメージを、水面を渡るボート(小舟)のイメージに託して作られたフレーズです。

「boat」という言葉は、名詞の「小舟」という名詞としての意味の他に、「～を運ぶ」という動詞としての意味も持っています。



本公演チラシ (design: Hiroshi Toyama)

公演概要

タイトル: boat here, boat (※英語が正式タイトル。全て小文字。日本語表記は、ボート ヒア、ボート)

日程: 2011年12月3日(土)15時・4日(日)15時・5日(月)15時

全3ステージ ※各回終演後トークあり。

会場: 川崎市アートセンター アルテリオ小劇場

川崎市麻生区万福寺 6-7-1 Tel.044-955-0107 小田急線「新百合ヶ丘」駅 北口より徒歩3分

構成・演出: 桑折 現(dots) / 出演: 谷川清美、チョン ヨンドウ、岩渕貞太、佐幸加奈子

構成補佐: 須藤崇規 / 音楽: 原 摩利彦 / 照明: 佐々木 真喜子(ファクター) / 音響: 齊藤 学 / 映像: ドリル

舞台監督: 弘光哲也 / 制作統括: 小島寛大(ANJ) / 制作: 河合千佳(ANJ) / 制作協力: 黒坂祐斗・本郷麻衣

チケット: (一般)前売 3,200円 当日 3,500円 (ユース)前売 2,500円 当日 2,800円

(高校生以下)2,000円〔前売・当日とも〕

※全席自由・日時指定・税込 ※ユース・高校生以下は、要証明書提示。 ※前売開始: 10月5日(水)

チケット取扱い: 川崎市アートセンター

ウェブサイト <http://kawasaki-ac.jp/>

チケット専用ダイヤル Tel.044-959-2255(平日 9:30-19:30)

チケットカウンター (9:30-19:30 ※休館日を除く)

e+(イープラス) <http://eplus.jp/>

主催: 川崎市アートセンター / 協賛: 株式会社資生堂 / 助成: 財団法人アサヒビール芸術文化財団

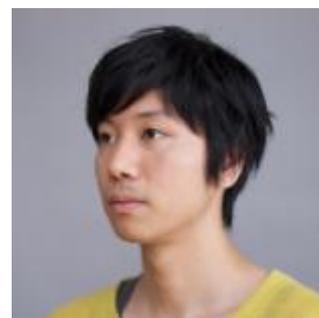
特別協力: 急な坂スタジオ(NPO 法人アートプラットフォーム) / 後援: 「しんゆり・芸術のまちづくり」フォーラム

企画・制作: NPO 法人アートネットワーク・ジャパン

演出家 プロフィール

桑折 現 | Gen Kori

演出家。dots 主宰。1979年生まれ。京都造形芸術大学にて太田省吾に師事。2001年、同大学在学中に dots を結成。舞台芸術に含まれる様々な要素を重層的に駆使し、独自の空間構成を構築して根源的な人間の〈存在〉を見つめる作品を発表し続けている。太田省吾のテキストを再構成した『10の地点』(2003・2004)で京都造形芸術大学学長賞。2003年、AI・HALLとの共同製作事業〈Take a chance project〉に選出される(2003～06年度)。近年の作品に、鉄板・砂・靴で構成された美術と身体による実験的作品『vibes』(2007/京都芸術センター舞台芸術賞 2007 ノミネート)、身体・煙・映像だけを用いた小空間でのパフォーマンス『nowhere』(2008)、特設水上舞台を設けた大規模な屋外公演『KISS』(2009)、鏡をモチーフにした劇場作品『カカメ』(2010)など。



dots 以外でも、海外のダンサー・振付家 23 名との作品『pointe to point』(2005/ASIA-EUROPE FOUNDATION 主催)や、アジア 4 都市を巡回する滞在型プロジェクト『Chasing the whale』(2006)に参加するなど幅広く活動している。 dots 公式 web サイト <http://dots.jp/>

出演者 プロフィール

谷川清美 | Kiyomi Tanigawa

演劇集団円所属。太田省吾『水の駅』・『ヤジルシ』、三谷幸喜『東京サンシャインボーイズの罫』『returns』をはじめ、阿部初美『アトミック・サバイバー』、『エコノミック・ファンタスマゴリア』、『Life On the Planet』(テキスト:松田正隆、音楽:大谷能生、ドラマトルク:長島確)など川崎市アートセンターのプロデュース公演、ヨッシー・ヴィーラー『四谷怪談』、ルティー・カネル『さくらのそのにつぼん』、PARCO プロデュース『ぼっちゃま』といった様々な舞台に出演。また、テレビドラマや映画への出演や吹き替えなど幅広く活躍。代表作にドラマ『春よ、来い』、『坊ちゃん教授の事件簿』、『菊亭八百善の人びと』、『娼婦と淑女』、映画『クイール』、『花のあと』、吹き替え『シャンドライの恋』、『ゴーストシップ』、『デンジャラス・ビューティー2』、『ER』、『サマーウォーズ』など。徳島県出身。



チョン・ヨンドウ | Jung Young Doo

俳優としての活動を経て、韓国芸術総合学院で舞踊を学ぶ。横浜ダンスコレクション 2004 で「横浜文化財団大賞」・「駐日フランス大使館特別賞」を受賞。観客の心に深く訴えかける数々のダンス作品を発表し、韓国を代表する気鋭のダンサー・振付家の1人として国際的な評価を獲得。マレピトの会(代表:松田正隆)『ディクテ』、『HIROSHIMA-HAPCHEON』への出演や、自身の振付作品『風の合間で』が「踊りに行くぜ!!vol.9」に招聘されるほか、京都国際ダンスワークショップフェスティバルに毎年講師として招聘されるなど日本でも多くの支持を集める。近年の作品に、移民労働者の痛みと希望を17人のダンサーと共に描いた『The Seventh Man』(2010 / LG アートセンター[韓国]プロデュース)など。Doo Dance Theater 主宰。



岩渕貞太 | Teita Iwabuchi

ダンサー・振付家。玉川大学芸術学科にて演劇を専攻。演劇と並行して日本舞踊・舞踏などを学ぶ。ダンサーとしてAPE、ニブロール、伊藤キム+輝く未来、Co. 山田うん、Ko & Edge.Coなどに参加。2005年より、自身の振付作品を発表する。2008~09年、坂あがりスカラシップに採択され、『タタタ』、『細胞の音楽』を製作・発表。2010年、音楽家・大谷能生を招いた実験作『UNTITLED』を発表。ワークショップの開催や同世代のアーティストとパフォーマンスユニット「群々」(むれ)を立ち上げる等、活動の幅を広げている。アサヒ・アートスクエア「Grow up!! Artist Project2011」サポートアーティスト。 <http://teita-iwabuchi.com/>



佐幸加奈子 | Kanako Sako

1988年生まれ。ウィーン在住。幼少よりクラシックバレエを杉原和子、山縣裕子、山口美佳の各氏に師事。15歳でウィーン・コンセルヴァトリウム音楽大学ダンス学部(オーストリア)に留学。エスター・バルフェ(フォーサイス・カンパニー)のクラスをきっかけに、コンテンポラリーダンスに興味を持ちバレエ科からモダンダンス科へ専攻を変えて卒業。日本人で初めてタンツクォーター・ウィーンの奨学生に選ばれる。様々な振付家の作品へ出演するほか、オーストリア各地で様々な音楽家や画家と共に即興を中心としたパフォーマンスを行う。2011年、「踊りに行くぜ！II」においてタケヤアケミ『SOSに関する小作品集』に出演し注目を集める。



スタッフ プロフィール

須藤 崇規 | Takaki Sudo

映像テクニカルディレクター。クリエイティブ・コレクティブ「ドリル」メンバー。主な映像プラン作品に、チェルフィッチュ(岡田利規演出)『ゾウガメのソニックライフ』(2011)、長島確演出『豊島区在住アトレウス家』、中野成樹演出『長短調 または眺め身近め』(2010)、阿部初美演出『アトミック・サバイバー』(2007)など。『nanpo house mix』(すみだ川アートプロジェクト 2011)では企画・構成を長島確と共に担当。フェスティバル/トーキョー2011「なにもない空間からの朗読会」では、映像・音響の技術統括を担当。2011年秋に監督作品『ほうほう堂@留守番』をHEADZより発売。



原 摩利彦 | Marihiko Hara

1983年生まれ。京都在住。京都大学教育学部卒業。静寂の中の強さをテーマに音作品に取りかかる。これまでに複数のアルバムを海外のレーベルより発表。舞台作品や映像のための音楽も担当し、dots や舞踊家ボヴェ太郎の作品の音楽を作曲。高谷史郎演出『明るい部屋 -La Chambre Claire』(びわ湖ホール公演)に音響として参加。また柳本奈都子とユニット「rimacona」を組み、2004年より活動。ニューカレドニア、イタリア、フランス等でライブを行う。2010年にはドイツ Mille Plateaux『Clicks & Cuts 5.0』に参加し、アルバム『黄昏とピアノ』(Parade)をリリース。ソロ最近作は、リズムに重点を置いたアルバム『Credo』(Home Normal)。

<http://www.marihikohara.com>

